横須賀市立中央図書館郷土資料室

緒明山通信11

OAKIYAMA-TSUSHIN

西湖之八景武之金沢模写図（江戸時代）
（縦 34.5cm×横 46.5cm）

発行日
令和５年（2023 年）５月 11 日

発行者
横須賀市立中央図書館郷土資料室
住所　神奈川県横須賀市上町 1-61
電話　046-822-2077

本誌は印刷発行していません。次の図書館あるいは市史編さん事業のホームページからダウンロードしてください。カラーでご覧いただけます。
https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/
https://www.city.yokosuka.kanagawa.jp/8150/shishi/shishi1-top.html

《 資料紹介 》

江戸時代三浦半島の海難史料

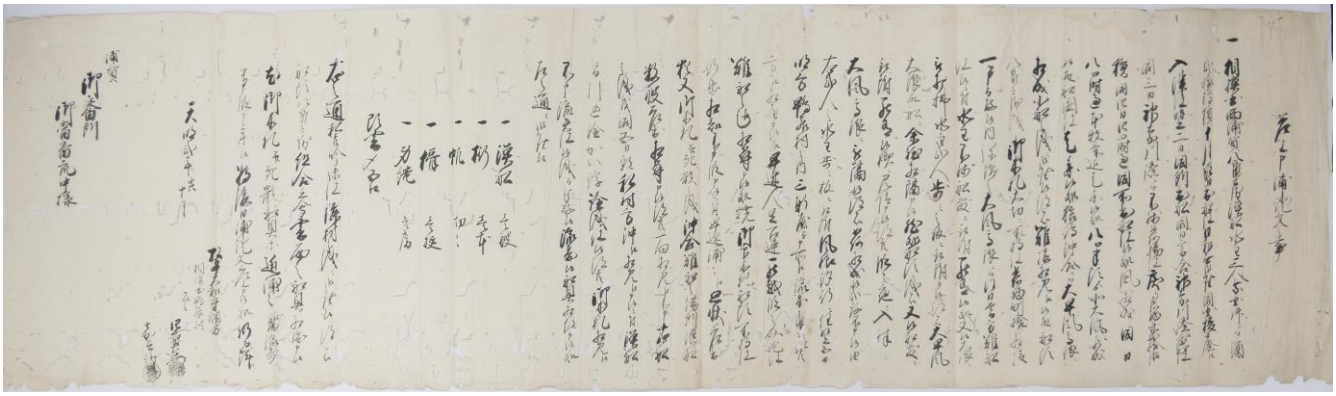
郷土資料室　谷合伸介

海に囲まれた三浦半島は、古くから交通の要衝であった。享保５年（1720）、浦賀番所が置かれるようになると、江戸に出入りする船はここで船改めを受ける必要があり、多くの船が往来した。反面、船の通行量の多い三浦半島周辺は、比較的海難が発生しやすい地域ともいえた。この地域の海難に関する史料は多く残されており、その一部は横須賀史学研究会編の全 31 冊の史料集（1966 年～1999 年）に収録されているが、今回は、そこには収録されなかった史料に焦点をあて紹介する。

江戸時代、海難が発生した際、その証明書として作成されたものが浦証文という文書である。この証文を得られれば、船頭は積荷などの損失の賠償責任を問われずに済むことから、非常に重要な文書となっていた。遭難した船が漂着した先の浦が担当となり、難船に至る経緯・捨て荷・船体・諸道具の状態などを詳しく調べ上げ作成した。したがって、浦証文には詳細な経緯等が記されているため、これを見ることで当時の海難に至る詳しい状況について知ることができる。そこで、まずは中央図書館に残る浦証文関係資料に注目し、その内容から当時の海難に至る状況について見ていきたい。

天明２年（1782）10 月１日、浦賀を出港した西浦賀の漁船は、酒 20 樽と水主（かこ）（水夫）３人を乗せ、同日榎戸湊に入った。翌日、船は榎戸を出船し、同日神奈川湊に到着すると、３日には、そこで全ての荷揚げを行う一方、米 20 俵の積みこみを行った。翌 4 日の午前 10 時過ぎ、船は神奈川湊を出船し、海も穏やかな凪の状態のなか順調に航行を続け、午後２時過ぎには本牧沖に達した。しかし、午後３時頃になると状況が一変する。強い北風にさらされるようになり、水主らは船の上の積荷が波でぬれないようにそれらを覆う処置を行ったが、猿島の沖合に差し掛かった時、強風と高波の影響で、小舟であっ

「差上申浦証文之事」（横須賀市立中央図書館郷土資料室蔵）



た同船は、ついに耐え凌ぐことができなくなってしまう。船頭の八郎兵衛は、通行手形であった木札を無くさないように大切に所持し、積荷の「刎捨」を行った。「刎捨」とは、船が悪天候等で危険な状態に陥った際、その安全を図るため、積荷の一部ないし全部を海に捨てることをいう。しかし、強風と高波は、その後も厳しさを増し、遂に船は破船し難破した。海に投げ出された水主らは船底材につかまっていたが、大波に打ち払われ、2 人の水主は、何とか歩板（あゆみいた）（船から人が渡るための渡り板）にしがみついた。しかし、強風と高波のため、八郎兵衛とは離れてしまう。八郎兵衛は、船底材につかまっていたように見受けられたが、次第に夜となり、さらなる強風と高波で互いに隔てられてしまったため、最早どのようになったのかもわからない状況となった。2 人の水主は歩板につかまりながら、潮の流れに身を委ねていたところ、翌 5 日の明け方、鴨居村内の三軒家に流れ着いた。その情報を得た鴨居村では、早速、人足を出し 2 人を介抱した。さらに、水主らに状況について尋ねたところ、船の通行に必要な木札は船頭が持っており、その船頭の行方は不明である旨を話したため、すぐに浦々に文書を回覧した。木札と船頭八郎兵衛の遺体を探すため、難船となった沖合の海域に漁船を数艘出して捜索したが、結局見つけることはできなかった。その後、鴨居村は流れ着いた船具 5 口とともに一連の経緯について浦賀番所に報告した。この一件は、漁船の西浦賀村とその水主らが漂着した鴨居村が「隣村」であり、また、その航行も浦賀から神奈川までの往復のなかで起きた海難であった。つまり、この史料からは近距離航海の中で生じた当時の海難の状況について窺い知ることができるのである。

一方、長距離航海のなかで起きたとみられる海難の記録は野比の最宝寺に残されている。最宝寺は、源頼朝が鎌倉の扇ヶ谷に創建したのが始まりとされ、建久 6 年（1195）、同じ鎌倉の弁ヶ谷（材木座付近）に移された。当初は、天台宗寺院であったが、開山の明光が、承元 3 年（1209）、親鸞に帰依し浄土真宗に改宗したことを機に、寺も浄土真宗となり本尊も阿弥陀如来とした。その後、同寺は大永元年（1521）の兵火で焼失し、鎌倉から寺領のあった野比に移転したとされる。

この最宝寺の文書について調べていくと、海に面する野比の寺院らしく、海難にまつわる重要な記録が残されていることが新たにわかってきた。死没者の法名やその年月日などを記した帳簿の寛政 8 年（1796）2 月 24 日分には、3 名の法名が記され、その下に【史料 1】の記述がみられる。

【史料 1】
摂州大石観力丸平五郎・同国御影栄寿丸吉五郎水主都合十六人つゝ二艘ニ而三十弐人、栄寿丸三崎浦・観力丸当浦ニ而水死、摂州平五郎　摂州吉五郎　摂州仁平治

【史料 2】
正月廿四日右者摂（州カ）□御影吉兵衛船水主廿二歳斗器量良方中勢嶌ノモゝ引ヲハク、廿七日□発、廿三日夜半大風起、松輪辺ニテ破船ト相見へ廿四日朝五時前六人船コウシニ乗、浪折キハ迄来、浜人助ケントスレ共、浪高難✓助、終浪間ニ入歿ス、

【史料 1】によると、摂津国大石（兵庫県神戸市灘区）の観力丸と同国御影（みかげ）（同市東灘区）の栄寿丸は、各船に水主 16 人ずつを乗せ、計 32 人で航行していたが、栄寿丸は三崎浦、観力丸は当浦（野比付近）で水主らが水死したことが書かれている。このうち、観力丸の平五郎と栄寿丸の吉五郎、そしてどちらの船の水主かはわからないが、仁平治という人物が、最宝寺で法名をそれぞれ付与され、供養されていたことがわかる。32 人の水主のうち一部生存者がいたのか、全員が死亡したのかは、この記述のみではわからないが、少なくともこの時、比較的規模の大きい海難が発生していたことは間違いない。また、少なくともここに記された 3 名は野比周辺で遺体があがったため、同寺で供養されたのであろう。

さらに、最宝寺末髙徳寺の文書にも、関連史料とみられる記録が残っている。髙徳寺は、最宝寺同様、野比に所在した寺院だったが、明治 20 年（1887）に廃寺となった。髙徳寺に伝来した文書等は、その後、最宝寺に納められたため、現在は「最宝寺文書」の

一部となっている。寛政 8 年 1 月 24 日の高徳寺の帳簿には、1 名の法名が記され、その下に【史料２】の記述がある。これによると、摂津国御影の吉兵衛は、器量の良い 22 歳程の水主で、背格好は中背、亡くなった時は股引を穿いた出で立ちだったようである。前月の 12 月 27 日であろうか、出発地とみられる摂津国を出港し、1 月 23 日には三浦半島付近に到達した。しかし、その日の夜半に大風が吹き、船は松輪付近で破船し難破した。翌 24 日の「朝五時」（いつつどき＝午前 8 時）前、6 人の水主が「船コウシ」（船格子）に乗り、沿岸まで近づいてきたので、浜の人たちが助けようとしたが、波が高く助けることができず、ついに彼らの姿は波間に消え、亡くなってしまったと記されている。

【史料 1】と【史料２】は、ほぼ同時期に摂津国の船が難船となり、その水主らが水死したという点で共通している。また、【史料 1】で、栄寿丸が「三崎浦」、観力丸が「当浦」（野比付近）でその水主らが水死したとする一方、【史料２】では、具体的な船名は不明なものの、松輪沖で破船し、その後、一部の水主らは高徳寺がある野比付近の浜で亡くなったとみられ、関連性が認められる。ただし、厳密には【史料 1】には難船となった日付が記されておらず、またその法名を付与した日付も 1 か月離れていることから、この情報だけではこの 2 つの史料が確実に同一の事柄を指し示しているとまではいえない。

しかし、この２つの史料をつなぐ記録が、東京都

【史料３】灘目の海難供養碑銘文（『東京都目黒区指定文化財調査報告書第４集』から引用）

（竿石前面）

南無阿弥陀佛　明顕山 祐天寺　祐全（花押）

（竿石右面）

溺死碑

寛政八丙辰之春正月二十三日の夜五更の頃豆州相州の浦々俄に颶風吹おこりて波浪天を浸し地を動し諒に雷電の輷がごとし然るに摂州兎原の郡灘目の船々石尤に吹碎かれて二艘は忽目前に沈めり時に水主初め三十三人は海底の藻屑となる嗚呼哀なる哉施主何某等彼人々のために青石を礲て此碑を建て永く菩提を弔ひ共に因縁をむすばしめんと云爾

（竿石左面）

誓誉往覚信士

普覚信士　名覚信士　深覚信士　梵覚信士　通覚信士
済覚信士　声覚信士　正覚信士　行覚信士　達覚信士
我覚信士　超覚信士　念覚信士　開覚信士　善覚信士
至覚信士　十覚信士　浄覚信士　彼覚信士　趣覚信士
成覚信士　□□□□　□□信士　智覚信士　門覚信士
道覚信士　□□□□　□□信士　眼覚信士　最覚信士

応誉生覚信士

（竿石背面）

願以此功徳　平等施一切　同発菩提心　往生安楽国

（台石前面）

摂州大石　観力丸　平五郎
摂州御影　永寿丸　吉五郎
寛政八丙辰歳春

目黒区の祐天寺に残されている。祐天寺には２基の海難供養碑（灘目の海難供養碑、白子組の海難供養碑）が残されており、当初より当寺に建てられていたものと推定されている。ここで注目したいのは、灘目の海難供養碑で、【史料 3】はその銘文である。

これによると、寛政 8 年 1 月 23 日の夜から翌明け方にかけ、伊豆から相模の浦々では暴風・高波となり、灘の酒樽を積み江戸に向かって航行していた摂津国大石の観力丸と同国御影の永寿丸の２艘の樽廻船がその影響で破船沈没し、水主ら 33 人が溺死したため、その供養のためにこの碑が建てられたとされる。もっとも、戒名が記されているのは 32 名であり、少なくともこの 32 名が亡くなっていたことは確実といえよう。この供養碑の建立者は不明であるが、廻船が難破した際、その場所が遠江国今切（静岡県湖西市新居町付近）より西であれば大坂の船問屋が、東であれば江戸の船問屋が、それぞれ残された積荷を処分したり、荷主に費用を分配するなどの慣例があったことから、江戸の船問屋が祐天寺に依頼してこの供養碑が建てられたのではないかとみられている。

【史料３】の内容を詳しく見ていくと、まず、その日時や遭難した船の地域が【史料２】と一致することがわかる。【史料２】では、同年 1 月 23 日の夜半から大風が起き、この影響で船が壊れ、投げ出された水主ら 6 人が翌 24 日の朝、船格子に乗り漂流していたことが記されているが、これは【史料３】の時系列と一致する。さらに【史料２】で溺死した人物が、摂州御影の水主という点も一致している。一方、【史料３】の台石前面に記された船名とその船頭とみられる名は、【史料１】の「摂州大石観力丸平五郎」及び「同国御影栄寿丸吉五郎」と一致しており、同一の事実を指し示していることがわかる。また、戒名の 32 名と【史料１】で難船となった 2 艘に乗船していた水主らの人数「水主都合十六人つゝ二艘ニ而三十弐人」も合致している。

以上のことから、【史料１】から【史料３】の３点は、寛政 8 年 1 月 23 日夜から翌 24 日早朝にかけ、三浦半島沖で起きた摂津国樽廻船２艘の海難史料として位置付けることができよう。【史料３】は従来から知られていた銘文であったが、廻船が難破した場所は相模湾付近といったこと以上の情報や手がかりはなかった。しかし、【史料 1】及び【史料２】の内容により、具体的に観力丸は「当浦」（野比付近）で、永（栄）寿丸は「三崎浦」で、それぞれ難破し水主らが亡くなったことがわかる。また、永（栄）寿丸が難船となった「三崎浦」も、【史料２】の内容から、具体的には松輪沖であった可能性も見えてくる。さらに、6 人の水主らは最後高波にのまれて亡くなるまで、沿岸近くまで漂流し生存していた事実もわかる。【史料３】で戒名として記された 32 名のうち、何名かの最期の様子が、この【史料 1】及び【史料２】には記されているのである。

なお、【史料１】で「平五郎」「吉五郎」「仁平治」に対し最宝寺の付与した法名と【史料２】で「吉兵衛」に対し髙徳寺が付与した法名は、【史料 3】で記された戒名（浄土真宗は法名）とは別名で一致していない。おそらく、【史料１】や【史料２】に記された 4 名については、遺体が漂着したか、死亡が確認された段階で、その浦の寺院が、そこで犠牲になった人の菩提を個々に弔った際に付与したものとみられ、【史料 3】は、後日犠牲になった人々全員を供養した際に、付与した戒名と思われる。したがって、少なくとも【史料 1】【史料 2】に出てくる 4 名は、【史料 3】と合わせ、2 つの戒名（法名）を有していたと推察される。

以上、本稿では江戸時代、三浦半島周辺で起きた海難をテーマに、前半は近距離航海での海難、後半は長距離航海での海難の史料について、考察を加えながら紹介した。現在のような気象予報もない時代、多くの船乗りが命がけで海の仕事に従事していた様子が見えてくる。

本稿執筆につき、目黒区教育委員会生涯学習課文化財係から資料提供を頂きました。厚く御礼申し上げます。

（参考文献）

・『海事史料叢書』第 7 巻（成山堂書店、1969 年）
・『東京都目黒区指定文化財調査報告書』第 4 集（東京都目黒区教育委員会、1994 年）
・『ものと人間の文化史　76-Ⅰ・和船Ⅰ』（法政大学出版局、1995 年）
・『新横須賀市史　通史編　近世』（横須賀市、2011 年）

郷土資料室事業概要（令和４年度）

1　レファレンス・サービス件数

○ 問い合わせ件数　93 件
○ 資料利用（掲載･放映等）許可件数　28 件
○ 資料貸出・閲覧件数　18 件
○ 所蔵資料の出陳件数　２件
○ 資料複製（デジタル化）件数　13 件

2　関連団体の研修会等参加実績

○ １月 24 日、神奈川県歴史資料取扱機関連絡協議会　令和４年度研修会　施設見学：川崎市市民ミュージアム〔宮城〕

※ 令和４年度に入っても新型コロナウィルス COVID-19 は終息の方向に向かわず、様々な研修会や講演会などが見送られた。その中で当該年度の後半には神奈川県歴史資料取扱機関連絡協議会の施設見学会が開催され復調の兆しが見え始めた。

3　依頼業務等

○ ５月３・４日 横須賀市自然・人文博物館所蔵考古資料調査への対応　調査者：愛知県埋蔵文化財センター〔佐藤〕
○ ５月６日 浦賀小学校第６学年社会科見学講師見学先：横須賀市自然・人文博物館〔佐藤〕
○ ７月６日～９月４日 横須賀美術館「運慶　鎌倉幕府と三浦一族」展　展示協力〔谷合〕
○ ７月 24 日、横須賀美術館「運慶　鎌倉幕府と三浦一族」展連続講座第１回「絵図から見る三浦一族」講師〔谷合〕
○ 11 月１日 市民大学後期講座「三浦一族と横須賀」、第１回「絵図から見る三浦一族と横須賀」講師〔谷合〕
○ 11 月 17・24 日、12 月１日 西コミュニティセンター講座「三浦一族が生きた鎌倉時代」講師〔谷合〕
○ １月 24・25 日 公文書管理規則第９条に基づく歴史資料の選別〔佐藤・谷合〕
○ ３月８・15・22 日 追浜コミュニティセンター歴史講座「鎌倉時代のその後…戦国時代への道」講師〔谷合〕
○ 展示図録 横須賀美術館･神奈川県立金沢文庫編『運慶 鎌倉幕府と三浦一族』（吉川弘文館 2022 年）収録のコラム及び作品解説４項目執筆〔谷合〕
○ まなびかんニュース 2022 年５～８･10～12 月号、2023 年１月号「Café des 三浦一族」①～⑧〔谷合〕
○ 神奈川県立図書館情報誌「こあ」、「郷土史を活用した『三浦一族 Calendar 2022』の作成について」〔谷合〕

4　所蔵資料等の公開・活用事業

○ 郷土資料室ミニ展示会『新発見･新着資料』展（中央図書館１階ロビー、４月 29 日～５月 25 日）
○ 郷土資料室ミニ展示会『横須賀美術館「運慶　鎌倉幕府と三浦一族」展関連展示会』（中央図書館１階ロビー、７月６日～20 日）
○ 郷土資料室ミニ展示会『戦争と市民の暮らし』展（中央図書館1階ロビー、７月 21 日～８月 23 日）
○ 写真展『戦争と市民の暮らし』（ウェルシティ市民プラザ５階まなびかんロビー、10 月 13 日～11 月９日）

『新発見・新着資料』展の様子

『戦争と市民の暮らし』展の様子

○ 図書館ホームページ「デジタルアーカイブ」での資料公開（☆＝令和４年度の追加分を含む）
A）市内の戦前期の絵葉書　126 点
B）絵葉書（横須賀海軍工廠建造の軍艦）　78 点（15 件）☆
C）貴重図書　4 点（ 3 件）
D）写真（ガントリークレーン、EM クラブ他）　173 点（16 件）☆
E）写真（旧軍関係）　54 点（ 2 件）
F）古文書・古記録　10 点（ 3 件）
G）地図・絵図　14 点（11 件）☆
H）図書館情報紙『いそしぎ』　7 件
I）郷土資料室『緒明山通信』　10 件　☆
J）「三浦一族 Calendar　2022」（NHK 大河ドラマ「鎌倉殿の 13 人」放送記念）

5　寄贈資料　（寄贈順、敬称略）

(1) 近衛歩兵第一連隊第七中隊記念写真帖等
　計４点　市内・中村静子

(2) 陸軍関係記念写真ほか　計 11 点
　市内・相澤英之

(3) 愛国婦人会たすき、奉公袋ほか　計６点
　市内・田丸定雄

(4) 大矢和雄家文書（海軍関係を含む近代資料）
　計 63 点　市内・大矢和雅

(5) 青年学校手帳、履歴表　２点
　横浜市・長瀬恵則

(6) 七夕水害映像記録、８ミリフィルム映写機　２点
　市内・安西穂高

(7) 米陸軍追浜兵器廠（Oppama Ordnance Shops）の
　表彰状及び関連写真　計４　神戸市・永安隆博

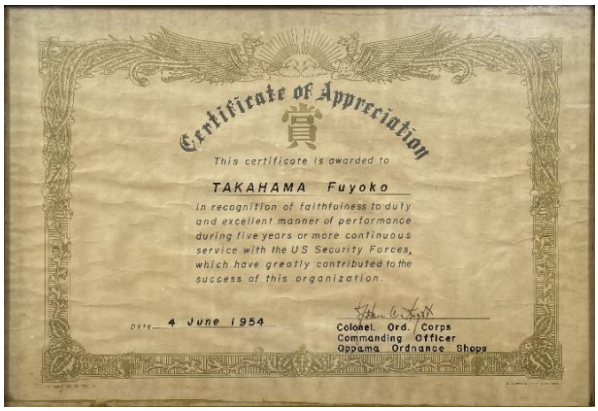
(8) 横須賀海軍工廠共済組合関連賞状ほか　計８点
　市内・久保木実

(9) 国立久里浜病院患者自治会の句集等
　計 60 点　横浜市・平出陽子

○ 庁内各部局等移管・寄贈資料

A)平成町埋立関連映像記録　16 点（港湾企画課）

B)「合唱と管弦楽のための組曲横須賀」（財務課）



Oppama Ordnance Shops の勤続を称える表彰状

国立久里浜病院患者自治会の俳句･短歌集（昭和20 年代）

6　図書寄贈者・団体等一覧　（五十音順、敬称略）

安祥文化のさと地域運営共同体、池田憲隆、
小田原市立中央図書館地域資料コーナー、
一般社団法人神奈川県高等学校野球連盟、
神奈川大学日本常民文化研究所、
神奈川県立公文書館、神奈川県立図書館、
神奈川県歴史資料取扱機関連絡協議会、
鎌倉市中央図書、川越市市制施行 100 周年会議、
川越市立博物館、木更津市教育委員会教育部文化課、
寒川公文書館、下関市立歴史博物館、下前哲夫、
世田谷区立郷土資料館、平　智征、田川文子、
茅ヶ崎市文化生涯学習課文化推進担当、
豊田市文化財課市史編さん室、長野市公文書館、
葉山郷土史研究会古文書部会、
常陸大宮市教育委員会市史編さん事務局、
福岡市博物館市史編さん室、藤沢市文書館、
藤田　亮、府中市ふるさと文化財課市史編さん担当、
町田市立自由民権資料館、
三浦半島の文化を考える会、柳川たづ江、
大和市文化スポーツ部文化振興課、横須賀考古学会、
横浜開港資料館、横浜市史資料室

6　刊行物

緒明山通信　第９号　令和４年６月 10 日
　令和４年７月５日改訂
緒明山通信　第 10 号　令和５年３月 31 日

7　事務執行体制の変更

	（令和４年度）	（令和５年度）
教育長	新倉　聡	新倉　聡
教育総務部長	古谷久乃	古谷久乃
中央図書館長	山口正樹	山田智子
図書サービス係長	深水賢一	深水賢一
《郷土資料室》		
主任	谷合伸介	谷合伸介
会計年度任用職員	佐藤明生	佐藤明生
会計年度任用職員	宮城　睦	宮城　睦
会計年度任用職員	堀井由貴子	堀井由貴子

あとがき

緒明山通信第 11 号をお届けします。今号では、江戸時代の史料から、三浦半島周辺海域で起きた海難について紹介しました。特に野比の最宝寺の史料は、江戸時代の海上輸送史・海難史の研究資料である祐天寺（東京都目黒区）の灘目の海難供養碑の関連史料にあたると考えられます。今後とも郷土資料を通じて見えてくる新たな事柄や見方について、ご紹介していけるように取り組んでまいります。

なお、本誌は印刷発行せず、ホームページからダウンロードしていただく方式により無償で頒布しています。

図書館 HP「デジタルアーカイブ」のご案内

横須賀市立図書館ホームページでは、「デジタルアーカイブ」のページを開設しています。戦前の絵葉書や写真等の郷土資料の他、『緒明山通信』（旧市史資料室通信）のバックナンバーもご覧いただけます。

下に記した URL か右側の QR コードからアクセスしてください。

https://www.yokosuka-lib.jp/contents/archive/